

# 田口八幡 I 遺跡

田口町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団







# 田口八幡 I 遺跡

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団





田口八幡宮遺跡全貌



田口八幡宮遺跡調査区全貌



田口八幡宮遺跡出土遺物

## はじめに

前橋市は、市内中央部に利根川、広瀬川が流れ、敷島公園や前橋公園、峰公園、大室公園などの公園が市内各地にあり、近代詩のふるさとであり、「水と緑と詩のまち」と呼ばれる自然と文化、歴史に恵まれた町です。

市内には古代からの歴史を物語る古墳、寺院などの史跡が残り、古代東国の中 心地であったことがわかります。

国指定の史跡は10ヶ所を数え、全国でも有数の地域といえます。現在、その整備も進められており、21世紀に残す文化財として地域の歴史を知る貴重な存在です。

また、市内では古代の人々の生活の跡もいたるところに残されており、各種の開発に伴っての発掘調査で発見されてきています。

前橋北部の赤城山南麓は、古代からの遺跡が市内でも特に多い地区で、土地改良事業が行われた田口地区も、小古墳が群をなして残されており、近世は佐渡奉行街道が通るなど史跡が多い地区です。

本年度の土地改良事業に伴っての発掘調査では、住居跡のほか、古墳の調査が行われ、地域の歴史を知るための貴重な資料を得ることができました。

本調査実施にあたりまして、ご協力いただきました関係課、地元関係者の方々、調査に従事されました作業員の方々に感謝申し上げるとともに、本報告書が、市史解明の一助となることを祈念して序といたします。

平成12年3月28日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
団長 渡辺勝利



## 例　　言

1. 本報告書は、前橋市田口町地区土地改良事業に伴う田口八幡I遺跡発掘報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市田口町359番地ほかに所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 渡辺勝利が、前橋市田口地区土地改良事業共同施行 施行委員長 岩崎四郎と委託契約を締結し実施した。  
調査担当および調査期間は以下の通りである。  
発掘・整理担当者 佐藤則和・平石和明(前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査係)  
発掘調査期間 平成11年9月10日～平成11年12月3日  
整理・報告書作成期間 平成11年12月6日～平成12年3月28日
4. 本書の原稿執筆・編集には、佐藤・平石が行った。整理作業をはじめ、図版作成には、石原義夫・岩木 操・岸クエ・渡木秋子・中澤光江・平林しのぶ・湯浅たま江・湯浅道子の協力があった。
5. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

## 凡　　例

1. 採図中に使用した北は座標北である。
2. 採図に建設省国土地理院発行の1/5万地形図(前橋)と1/2.5万地形図(渋川)を使用した。
3. 本遺跡の略称は11B6である。
4. 本遺構および遺構施設の略称は次のとおりである。  
H…住居址 P…柱穴
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。  
遺構 住居址…1/30・1/60 古墳…1/80 全体図…1/200・1/300  
遺物 土器…1/3・1/4 鉄器…1/3  
石器・石製品…1/3 2/3
6. スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図 烧土…

遺構断面図 構築面…

遺物実測図 須恵器断面…黒塗

灰釉陶器断面…

灰釉陶器内面…

黒色処理…

## 目 次

はじめに	
I 調査に至る経緯	2
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の位置	2
2 歴史的環境	2
III 調査の経過	
1 調査方針	6
2 調査経過	6
IV 基本層序	8
V 遺構と遺物	
1 住居址	9
2 古墳	13
VI まとめ	14

## 図 版

図 絵 田口八幡 I 遺跡全景		田口八幡 I 遺跡出土遺物	
田口八幡 I 遺跡調査区全景			
PL	頁	PL	頁
1 A, B, C 区全景		5 A, B, C, D 区全景	31
H-1, 2, 3号住居址、H-4号住居址竪	27	6 M-1号墳全景	
2 H-4~7号住居址		M-1号墳石室正面	
H-5号住居址竪周辺、H-5号住居址竪	28	M-1号墳西側壁	
3 H-8~10号住居址		M-1号墳周縁トレンチ	32
H-8, 10号住居址竪	29	7 H-2, 3, 5, 9, 10, 13号住居址	
4 H-11~14号住居址		出土の土器	33
H-13, 14号住居址竪		8 H-13, 14号住居址出土の土器	
H-10, 13号住居址遺物出土状態	30	鉄器・特殊遺物・石器	34

## 挿 図

Fig	頁	Fig	頁
1 田口八幡 I 遺跡の位置	1	9 H-1, 2, 3, 6号住居址	19
2 田口八幡 I 遺跡周辺遺跡図	5	10 H-4, 5, 7, 8号住居址	20
3 調査経過図	6	11 H-9, 10号住居址	21
4 田口八幡 I 遺跡調査区設定図	7	12 H-11, 12, 13, 14号住居址	22
5 A区東地点層序	8	13 M-1号墳	23
6 B区東地点層序	8	14 H-2, 3, 5, 9, 10号住居址出土の土器	24
7 A区全体図	17	15 H-10, 13, 14号住居址出土の土器	25
8 B, C区全体図	18	16 特殊遺物・石器・鉄器	26

## 表

Tab	頁	Tab	頁
1 土器観察表	16	3 鉄器観察表	16
2 特殊遺物・石器観察表	16		

調査参加者 石原義夫 岩木操 岸フクエ 渡木秋子 中澤光江 平林しのぶ 湯浅たま江 湯浅道子





Fig 1 田口八幡 I 遺跡の位置

## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市田口町を対象とした土地改良事業実施に伴い行われた。平成9年5月6日付けで前橋市役所農村整備課より田口町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の試掘依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、同年5月20日同教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで依頼者と協議・調整を行い、11年8月17日、同依頼者より同教育委員会あてに本発掘調査の依頼がなされた。同教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 渡辺勝利）はこれを受諾し、9月10日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、9月16日、現地での発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称「田口八幡I遺跡」の「八幡」は旧地籍の小字名を採用した。

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

田口八幡I遺跡は、前橋市街地から北へ約7kmの田口町359番地他に所在する。前橋市の北端部に位置し、遺跡地の東は富士見村、北は北橋村、西は利根川を挟んで対岸に吉岡村と隣接する。本遺跡地の前橋市田口町は、昭和29年に前橋市に合併されたもので、それまでは勢多郡南橋村大字田口であった。西には国道17号線が南北に走り、南には県道四ッ塚・原之郷・前橋線が東西に走る。そして、北橋村で利根川から取水した大正用水が町を横断し、前橋北部、東部の重要な農業用水となっている。

本遺跡地は、赤城火山斜面の西傾斜地の末端部に位置する。そして、北橋村と隣接する周辺には橋山、城山に代表されるような孤立丘に富む地形が目立ち、本遺跡地南にも孤立丘と思われる八幡山がある。これらの孤立丘は旧利根川により浸食された西側が崖となっている。この旧利根川は本遺跡の南方で方向を南東に変え、広瀬川低地帯へと続く。東方には赤城火山斜面の白川原状地が広がっており、本遺跡地東には赤城山麓から南流する法華沢川が流れ、放射谷が形成されている。谷部の低地では水源を利用した水田が広がり、尾根部の台地上は集落と桑畠を主とする畑作が営まれている。本遺跡地は台地の縁部にあたり、北西から東あるいは南東に向かって傾斜し、法華沢川が流れる低地につながる。そして、南には前橋市街地が眼下に広がり、まさに台地と平地の境という印象がある。標高は162~152mである。

### 2. 歴史的環境

田口八幡I遺跡から検出された主な遺構は、平安時代の住居址である。また、覆土の中には、縄文土器の小片がみられた。周辺の遺跡を概観してみたい。

縄文時代：隣接する富士見村では、横室、原之郷、時沢など標高150m前後の地域から、傾斜変換点である標高400~450mの地域にまで、縄文時代の遺跡地が分布している。時期的に見ると、遺跡数は前期と中期に多く、赤城山南麓の一般的な傾向と同様に、早期・後期・晩期は少ないようである。赤城山大洞では早期の土器が採集された。北橋村の城山遺跡(1)は、撫糸文系土器(夏島式期から稻荷台式)の時期に限定され、県内では縄文

時代最古の集落の一つに数えられている。竪穴住居址 6軒、集石遺構 6、土坑25基が検出された。北橋村の柴山遺跡(3)は、前期・中期の竪穴住居址が17軒が検出された。富士見村の田中遺跡(30)では、早期未葉から前期にわたる土器が出土し、前期の竪穴住居址 2軒、土坑のほか、特に配石遺構が注目されている。富士見村の陣場遺跡(27)では、前期の竪穴住居址が 7軒のうち、小型石棒を伴う住居があった。中期の竪穴住居址が16軒、後期の敷石住居址は 2軒検出された。富士見村の下庄司原西遺跡(26)では、前期の竪穴住居址が 5軒検出された。富士見村の上庄司原東遺跡(26)では前期の竪穴住居址 5軒が検出された。うち、2軒から小型石棒が出土している。富士見村の白川遺跡(14)では、後期の竪穴住居址が 1軒検出された。富士見村の愛宕山遺跡(16)では、前期の遺物、竪穴住居址が12軒検出された。富士見村の田中田遺跡(32)は、前期の竪穴住居址が 2軒検出された。富士見村の雁谷戸遺跡(6)では、前期の竪穴住居址 1軒が検出された。富士見村の久保田遺跡(21)は、前期の遺物、竪穴住居址が 6軒が検出された。富士見村の岩之下遺跡では、前期の遺構・遺物、富士見村の長泉寺遺跡(11)では、前期と中期の遺構が検出された。富士見村の由森遺跡(13)は、竪穴住居が 2軒検出された。上細井町にある西堀遺跡では土坑 1基が検出された。

**弥生時代**：田口八幡 I 遺跡の周辺地域では、弥生時代の遺構は検出されていない。富士見村の田中田遺跡(32)では、中期前半の須和田式に比定されると思われる土器片が多数出土している。このことから、この周辺地域でも弥生時代の遺構の存在する可能性がある。

**古墳時代**：田口八幡 I 遺跡から、北東に約1000mの場所に、富士見村横室地区がある。この地区では、10基の古墳が存在している。田口八幡 I 遺跡の周囲で古墳が多く分布している地域は、白川沿いの富士見村原之郷・時沢・小沢、北橋村の米野・山口の地区である。標高は150~250mの範囲に多いが、米野から山口にかけては標高約400m付近まで分布している。田口町にある塩原塚古墳(27)は、墳丘の直径14m前後、高さ南端約 3m、北端2.6mの円墳で両袖型の横穴式石室である。墳丘は川原石による葺石がなされている。石室入り口周辺部は特に丹念に葺かれていた。富士見村の初室古墳(24)は、墳丘の直径15m、幅約 8 m の平坦面を挟んで山側に馬蹄形の周堀がめぐる。自然石乱石積の両袖型の石室からは、金銅製頭椎太刀の柄頭と、これに伴う装具類、鉄製馬具、耳環、土器などが出土した。富士見村の田中田遺跡(32)は、前期から後期まで継続したとみられる竪穴住居址が66軒検出された。陣場遺跡(28)では、終末期の円墳を調査しており、直刀、須恵器壺などが出土している。上細井町にある南田之口遺跡では、竪穴住居址 8軒、掘立柱建物址 1軒、溝11条、土坑11基が検出された。青柳町にある引切塚遺跡(42)では、竪穴住居址が27軒検出された。上細井町にある西堀遺跡では、古墳時代後期鬼高 II 期の竪穴住居址が 3 軒検出された。富士見村の白川遺跡(14)では、FA 前後の中期の竪穴住居址が多く、16軒検出された。特に、竹製の小型編み籠が見つかり、類例も少なく貴重な資料である。富士見村の下庄司原東遺跡(26)では、前期の前方後方形を含む 4 基の方形周溝墓、竪穴住居址 1軒、後期の竪穴住居址 11軒が検出された。富士見村の下庄司原西遺跡(26)では、終末期の円墳 1基が調査されている。富士見村の上庄司原西遺跡(26)では、前期の方形周溝墓 1基が調査されている。富士見村の上庄司原北遺跡(26)では、終末期の円墳 1基が調査されている。試掘では、縄文前期・中期・平安時代の遺構と遺物があることが分かっている。富士見村の上庄司原東遺跡(26)では、終末期の円墳 2基が調査されている。そのうち、1基は未盗掘で、直刀、小刀、馬具、ガラス小玉、鉄鏃、土器類が出土した。須恵器の子持ハソウは、ほかに類例の無い貴重なものである。

**奈良・平安時代**：この時期の集落も古墳時代と同様に、縄文時代の遺跡同様な分布がみられる。周辺の標高150m~450mまでの地域で遺物の散布が比較的密に分布している。赤城山の地蔵岳南面（標高1370m付近）に

も散布が認められており、山岳信仰に関連する遺物と思われている。富士見村の窪谷戸遺跡(6)では、竪穴住居址が50軒検出された。青柳町にある引切塚遺跡(42)では、奈良時代の竪穴住居址が3軒検出された。

青柳町にある青柳寄居遺跡(44)では、平安時代の竪穴住居址12軒のほか、水田址が検出された。富士見村の愛宕山遺跡(16)では、平安時代の炭窯跡が検出された。富士見村の岩之下遺跡(34)は、3×3間の掘立柱建物が東西に並んでいた。柱穴から墨書き土器も検出している。富士見村の久保田遺跡(21)は、竪穴住居址の15棟中1棟は小鐵冶遺構であった。富士見村の長泉寺遺跡(11)では、竪穴住居址4軒、掘立柱建物1軒、溝、土坑が検出された。平安時代の土坑は底面と壁面が焼け、さらに多量の薫灰が出土しているため、土器の焼成遺構の可能性も考えられている。富士見村の由森遺跡(13)は、平安時代の集落を中心とする遺跡で、竪穴住居址3軒、掘立柱建物10軒は、小規模ながら規格的に配置された様相が認められている。北橋村の柴山遺跡(3)は、竪穴住居址21軒、掘立柱建物、炭窯などが検出された。富士見村の陣場遺跡(26)では、竪穴住居から銅製帶金具、鉄製ハサミ、スキ先、刻字筋籠車などが出土している。富士見村の下庄司原西遺跡(26)では、竪穴住居址21軒が検出された。そのうち、300点を超える土鍤が一括して出土したことが注目されている。富士見村の下庄司原東遺跡(26)では、竪穴住居址が40軒検出された。富士見村の上庄司原西遺跡では、竪穴住居跡が6軒検出された。上庄司原東遺跡(26)では、竪穴住居址が7軒、土坑墓1、中世の土坑墓1が検出された。富士見村の白川遺跡(14)では、竪穴住居址が、14軒検出された。



- |                 |           |               |           |              |
|-----------------|-----------|---------------|-----------|--------------|
| 1. 田口八幡 I・II 通跡 | 9. 三反田通跡  | 18. 日向通跡      | 27. 塙原跡古墳 | 36. 九十九古墳    |
| 2. 篠城跡          | 10. 赤城通跡  | 19. 森山古墳      | 28. 隆陽古墳  | 37. 九十九山古墳   |
| 3. 丸山通跡         | 11. 長糸寺通跡 | 20. 道上古墳      | 29. 橋宮古墳  | 38. 原之郷東城跡通跡 |
| 4. 瓜山通跡         | 12. 高崎通跡  | 21. 久保田通跡     | 30. 田中通跡  | 39. 堀久保通跡    |
| 5. 丸山城跡         | 13. 由西通跡  | 22. 小沢の場      | 31. 寄居通跡  | 40. 青柳宿上通跡   |
| 6. 鹿谷戸通跡        | 14. 白川通跡  | 23. 原之郷城跡通跡   | 32. 寛井古墳  | 41. 堀久保日通跡   |
| 7. 塚程城跡         | 15. 錦塚古墳  | 24. 初室古墳      | 33. 田中通跡  | 42. 引切原通跡    |
| 8. 笠原通跡         | 16. 愛宕山通跡 | 25. 庄司原古墳     | 34. 君之山通跡 | 43. 宿上通跡     |
|                 | 17. 愛宕通跡  | 26. 岐場・庄司原通跡群 | 35. 金山城跡  | 44. 青柳寄居通跡   |

Fig 2 田口八幡 I 通跡周辺遺跡図

### III 調査の経過

#### 1. 調査方針

委託された調査箇所は幅5mの計画道路部分を中心とした約1,700m<sup>2</sup>である。うち、L字状の角部分は試掘の結果から、除外したため調査面積は、約1,100m<sup>2</sup>となった。調査範囲の形状から全体をA区、B区、C区、D区、M-1号墳の5調査区に区分した。調査実施に際しては、まず発掘調査範囲に4mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向をY軸とし、北から南へY1, Y2, Y3, … 東西方向をX軸として西から東へX1, X2, X3, … で表しそれぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

1. 土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。
2. 10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にして図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作成し、取り上げに際しては遺物台帳に所属属性を記録する。
3. 瓦は原則として1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。

なお、今年度の測量の基準点は、X0・Y0ポイントである。この地点の公共座標は第IX系(X=+49550.000m, Y=-69780.000m)である。

#### 2. 調査経過

発掘調査委託契約を9月10日に締結し、16日から現地発掘調査を開始した。重機(バックフォー0.4m<sup>3</sup>)によりA区、B区、C区と表土掘削を行い、21日に終了した。24日からジョレンによる遺構確認、掘り下げ、精査を行った。A区は、現地表面の耕作土の下から黄褐色のローム混土層が表れ、遺構確認は比較的容易にできた。B区はC区に向かって、徐々に地形が傾斜していた。FP混じりの黒褐色土層中から遺構が検出されたが、遺構のプランがはっきりしなかったため、重機による表土掘削をやや上で止めておいた。住居址の掘り込みは深く、掘り下げに多くの時間を要した。C区は東側に急傾斜しており、遺構は検出されなかった。10月19日、D区を表土掘削した。同日、ジョレンによるプラン確認を行ったが、遺構は検出されなかった。11月18日、古墳の調査を開始した。周囲の確認のためトレンチを入れ、周囲の範囲を確認した。その後、残存していた石室部分を中心に調査を開始した。12月2日、調査区の空撮を実施し、3日、現地での調査を終了した。整理作業・報告書作成は、12月6日から、翌年3月28日まで行った。

	9月	10月	11月	12月
A区	■	■		■
B区	■	■		■
C区	■	■		■
D区		■		■
M-1			■	■

表土掘削

遺構掘り下げ精査

写真・図面作成

全体写真撮影

Fig 3 調査経過図

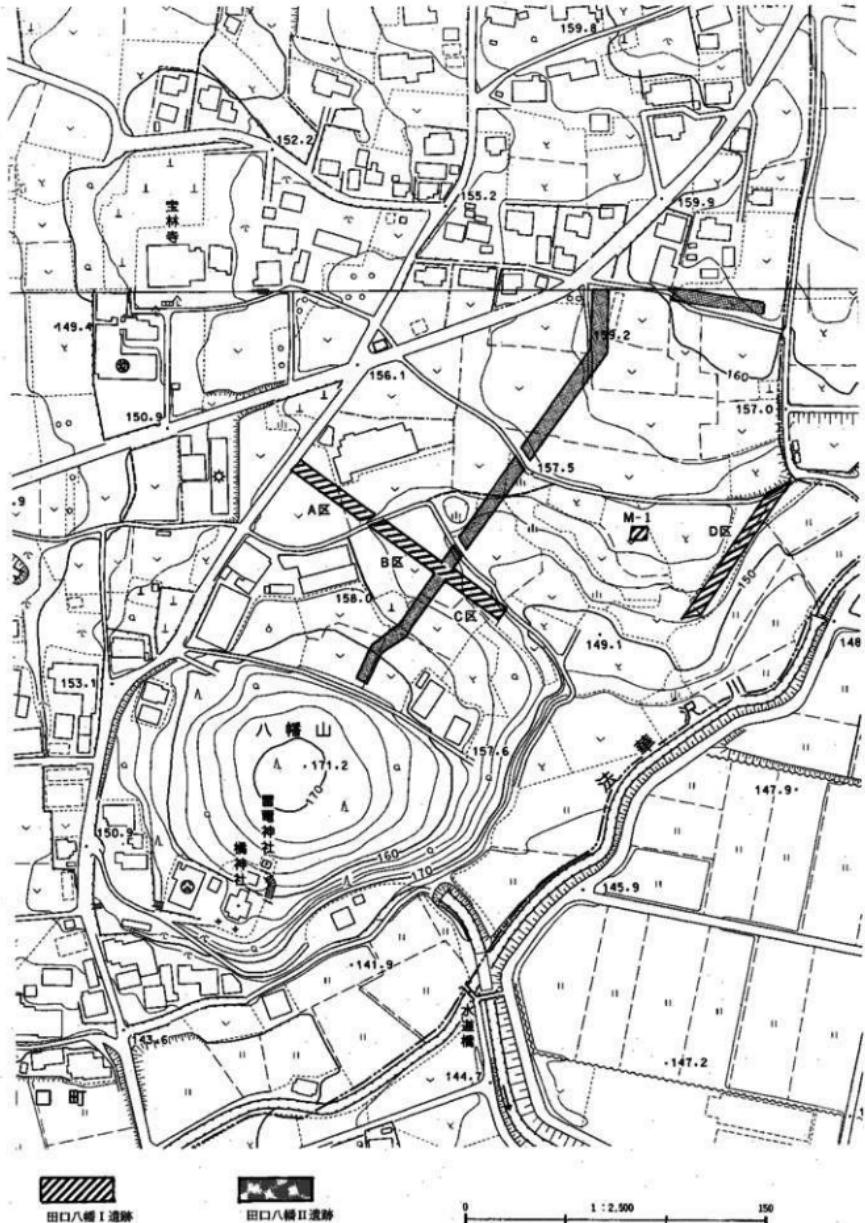
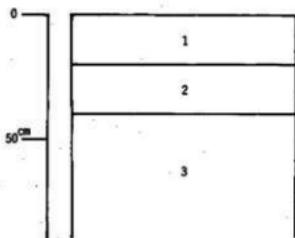


Fig. 4 田口八幡I遺跡調査区設定図

#### IV. 基本層序

本遺跡地は、赤城火山斜面の西傾斜地の末端部に位置し、ローム層が厚く堆積している。A区、B区西部は表土が薄く、現地表面から遺構面であるローム層までは40cmしかなく、ローム層の上にはFP軽石混じりの黒色土層がある。黒色土層が最も堆積していたB区東では、現地表面から黒色土層遺構確認面まで、120cmもあり、ローム層までは165cmもあった。A区東地点、B区東地点の各層序は、Fig5,6のとおりである。

L = 156.30m



L = 154.50m

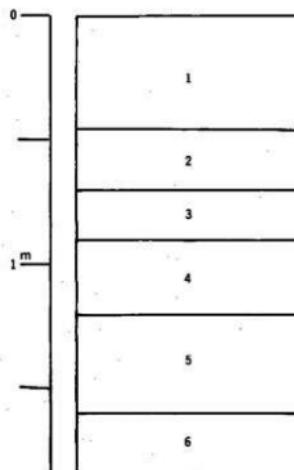


Fig 5 A区東地点層序

- 1層 耕作土
- 2層 褐色細砂層 FP5%含む。
- 3層 黄褐色微砂層 ローム。  
遺構確認面。

Fig 6 B区東地点層序

- 1層 耕作土
- 2層 暗褐色細砂層 FP5%含む。
- 3層 黑褐色細砂層 FP15%含む。
- 4層 黑褐色細砂層 FP1%含む。  
ローム少量混ざる。  
遺構確認面。
- 5層 にぶい黄褐色細砂層  
黒色土とロームとの混土。
- 6層 黄褐色微砂層 ローム。

## V 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴式住居址14軒、古墳1基である。A区からB区西部にかけてのローム層を掘り込んでいるH-1～8号住居址は、残存状況が比較的悪く、住居址の掘り込みも10～25cmほどであった。竈の残存も悪く、竈底部の焼土が確認できる程度のものも少なくなかった。B区中央部から東、田口八幡II遺跡調査区との交点付近までの区域はローム層の上にFP軽石を含む黒色土層が堆積しており、ローム層面が東に傾斜するにつれて、その堆積も厚くなっている。この黒色土層は田口八幡II遺跡調査区との交点付近を最大としてC区に向かうにつれ、薄くなっている。そのため、C区中央部からはまた、ローム層が現れている。当初、この黒色土層は覆土と考えていたが、調査を進めるにつれ、この層から竈と思われる焼土が検出されたこと、まとまった土器片が検出されたことから、遺構面と考える必要が出てきた。そのため、再精査を行った結果、6軒の住居址を検出することができた。これらの住居址は黒色土層を30～75cmほど掘り込んでいるため残存状況は比較的良好であった。A、B調査区とも調査範囲が道路幅5mと限られていたため、1住居址を完全に確認することができたものは1軒のみにとどまり、他の住居址は一部検出のみとなった。

出土遺物は全体的に流れ込みと思われる小破片が多く、住居址に伴う遺物は少なかった。特に掘り込みが浅く残存状況の悪い住居址では極端に少なかった。小破片は土師器を中心だが、繩文の破片も見られた。復元できたものは23個体にとどまった。

M-1号墳の現状は畠の中の小高くなっているところに1m大的巨石が20ほど集まっていた。当初、石室部分が良好に残っていると思われたが、これらの巨石の下から現代の廃棄物が多數出てきたため、これらの石が動かされていると判断した。そして、これらの石を除去した結果、当時のまま残存している3つの石を確認し、これらの石に囲まれた石室部を検出できた。このような状態なので石室部の残存状態も悪く、古墳に伴う遺物は検出されなかった。周堀は、墳丘部を中心に四方にトレーンチを入れ、確認した。

### 1 住居址

#### H-1号住居址 (A区 Fig.9 PL.1)

- ◎位 置 X6, Y33～34 ◎面積 (0.49m<sup>2</sup>) ◎方位 N-50°-W
- ◎形 状 長径 (1.0m) 短径 (0.6m) 住居址のほとんどが調査区外へ延びるため、南東部角のみの検出。  
掘り込みは21cm
- ◎床 面 ハードローム層の堅緻な面を確認したが、踏み固められたものではない。
- ◎竈・炉 確認されず。
- ◎ピット 南東部に1基検出。 P1 長径26cm×短径23cm×深さ41cm
- ◎遺 物 なし
- ◎備 考 出土遺物がなく、遺構も一部検出のため、時期不明。

#### H-2号住居址 (A区 Fig.9 PL.1)

- ◎位 置 X7, Y35～36 ◎面積 8.13m<sup>2</sup> ◎方位 N-80°-E

- ◎形 状 長径3.52m 短径2.62m 東壁がやや変形しているが、隅丸方形を呈する。掘り込みは20cm
- ◎床 面 撹乱が入っており、所々壊されているが、やや凹凸があり、西部を中心に部分的に堅緻な面が残っている。周溝は西壁に残存。全周はしていない。
- ◎竈 東壁やや南に位置し、焚口部幅40cm、奥行き75cmを測る。
- ◎遺 物 土師器片113点、須恵器片37点、灰釉陶器片9点、鉄器1点、うち壺1点、皿1点を図示した。
- ◎備 考 9世紀後半の時期と考えられる。

#### H-3号住居址 (A区 Fig.9 PL.1)

- ◎位 置 X9~10, Y37 ◎面積 8.13m<sup>2</sup> ◎方位N-1°-W
- ◎形 状 長径3.26m 短径2.94m 隅丸方形を呈する。掘り込みは13cm
- ◎床 面 撹乱が入っており、所々壊されているが、やや凹凸があり、部分的に堅緻な面が残っている。周溝は西壁に残存。全周はしていない。
- ◎竈 中央東壁寄りに焼土を検出。しかし、東壁の竈と思われる部分が撹乱で壊されているため、竈全体は確認できなかった。
- ◎ピット 5基検出。
  - P<sub>1</sub> 長径40cm×短径37cm×深さ30cm
  - P<sub>2</sub> 長径53cm×短径50cm×深さ43cm
  - P<sub>3</sub> 長径76cm×短径60cm×深さ11cm
  - P<sub>4</sub> 長径94cm×短径60cm×深さ23cm
  - P<sub>5</sub> 長径35cm×短径33cm×深さ16cm
- ◎遺 物 土師器片50点、須恵器片29点、鉄器2点、うち壺1点を図示した。
- ◎備 考 11世紀初の時期と考えられる。

#### H-4号住居址 (A区 Fig.10 PL.1,2)

- ◎位 置 X10~11, Y38~39 ◎面積 (7.15m<sup>2</sup>) ◎方位N-83°-W
- ◎形 状 長径(3.52)m 短径3.14m 隅丸方形を呈する。掘り込みは18cm
- ◎床 面 平坦で踏み固められた堅緻な床面。
- ◎竈 東壁中央に位置し、焚口部幅16cm、奥行き68cmを測る。  
煙道部付近に自然の川原石を使用。
- ◎貯藏穴 南東部より1基検出。床下土坑の可能性もある。
- P<sub>1</sub> 長径154cm×短径97cm×深さ34.5cm
- ◎遺 物 土師器片66点、須恵器片16点である。
- ◎重 複 H-5号住居址と重複。H-4号住居址のほうが古い。
- ◎備 考 9世紀後半の時期と考えられる。

#### H-5号住居址 (A区 Fig.10 PL.2)

- ◎位 置 X10~11, Y38~39 ◎面積 (9.8m<sup>2</sup>) ◎方位N-83°-W
- ◎形 状 長径4.84m 短径4.15m 隅丸方形を呈する。掘り込みは23cm
- ◎床 面 平坦で踏み固められた堅緻な床面。周溝が全周する。

- ◎竈・炉 東壁の南よりに位置し、焚口部幅19cm、奥行き102cmを測る。
- 両袖部に砂岩を加工して使用。支柱石に砂岩を使用。
- ◎ピット 南壁中央寄りに1基検出。 P1 長径20cm×短径17cm×深さ33cm
- ◎遺物 土師器片103点、須恵器片42点、灰釉陶器片2点、鉄器1点、磁器1点、うち、かわらけ坏1点、高坏1点を図示した。
- ◎重複 H-4号住居址と重複。H-5号住居址のほうが新しい。
- ◎備考 11世紀初の時期と考えられる。

#### H-6号住居址 (A区 Fig.9 PL.2)

- ◎位置 X14, Y39~40 ◎面積 (7.13m<sup>2</sup>) ◎方位N-68°-W
- ◎形状 長径 (3.84) m 短径 (2.58) m 床面まで削平されており、壁の残存も部分的である。残存部から隅丸方形を呈すると思われる。掘り込みは2cm
- ◎床面 削平により部分的な残存だが、堅緻な床面を確認できた。
- ◎竈・炉 削平により確認できなかったが、東壁中央付近より、焼土が堆積している範囲を検出。竈と思われる。
- ◎備考 遺構の検出状況や出土遺物がないため、時期不明。

#### H-7号住居址 (A区 Fig.10 PL.2)

- ◎位置 X14~15, Y40 ◎面積 (8.45m<sup>2</sup>) ◎方位N-44°-W
- ◎形状 長径 (3.52) m 短径2.03m隅丸方形を呈する。掘り込みは24.5cm
- ◎床面 平坦でやや柔らかい床面。
- ◎竈・炉 住居址東部が調査区外に延びているため、確認できず。
- ◎遺物 土師器片7点、須恵器片4点である。
- ◎備考 出土遺物が少ないため、時期は不明。

#### H-8号住居址 (B区 Fig.10 PL.3)

- ◎位置 X16~17, Y43 ◎面積 (3.35m<sup>2</sup>) ◎方位N-85°-E
- ◎形状 長径 (2.40) m 短径2.03m 隅丸方形を呈する。掘り込みは14.5cm
- ◎床面 竈付近に堅緻な床面。他はやや柔らかい。
- ◎竈 東壁に位置し、焚口部幅30cm、奥行き80cmを測る。天井部の一部が残存。粘土、石等の補強材は使用していない。
- ◎遺物 土師器片7点、須恵器片4点である。
- ◎備考 9世紀後半の時期と考えられる。

#### H-9号住居址 (B区 Fig.11 PL.3)

- ◎位置 X19~20, Y43~44 ◎面積 (16.28m<sup>2</sup>) ◎方位N-86°-E
- ◎形状 長径 (5.7) m 短径4.86m 隅丸方形を呈する。掘り込みは48.5cm
- ◎床面 平坦で踏み固められた堅緻な床面。部分的に焼土混じりの柔らかい部分がある。南東部に高まりが

ある。周溝が西壁にある。

◎竈 住居址北、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎ピット 7基検出。

P<sub>1</sub> 長径56cm×短径45cm×深さ26cm P<sub>2</sub> 長径24cm×短径23cm×深さ17cm

P<sub>3</sub> 長径44cm×短径36cm×深さ14cm P<sub>4</sub> 長径26cm×短径24cm×深さ19cm

P<sub>5</sub> 長径30cm×短径26cm×深さ32cm P<sub>6</sub> 長径60cm×短径47cm×深さ20cm

◎貯蔵穴 南西部より1基検出。 P<sub>7</sub> 長径156cm×短径123cm×深さ30cm

◎遺物 繩文片1点、土師器片253点、須恵器片19点、灰釉陶器片9点、紡錘車1点、鉄器2点、土鍤5点、うち皿3点、甕1点を図示した。

◎備考 9世紀後半の時期と考えられる。

#### H-10号住居址 (B区 Fig.11 PL.3)

◎位置 X21~22, Y45~46 ◎面積16.37m<sup>2</sup> ◎方位N-62°-W

◎形状 長径4.30m 短径4.18m 槌丸方形を呈する。掘り込みは75cm

◎床面 平坦で踏み固められた堅緻な床面。周溝が全周する。

◎竈 東壁の南よりに位置し、焚口部幅52cm、奥行き115cmを測る。

焚口部は広く、煙道部の立ち上がりは急傾斜。袖部に砂岩で補強。

◎ピット 5基検出。

P<sub>1</sub> 長径14cm×短径13cm×深さ14cm P<sub>2</sub> 長径25cm×短径21cm×深さ15cm

P<sub>3</sub> 長径32cm×短径25cm×深さ26cm P<sub>4</sub> 長径24cm×短径23cm×深さ20cm

P<sub>5</sub> 長径28cm×短径25cm×深さ25cm

◎遺物 繩文片2点、土師器片352点、須恵器片5点、紡錘車1点、鉄器3点、うち、坏2点、かわらけ1点、深鉢1点、甕2点を図示した。

◎備考 竈南から壠状遺構を検出。9世紀前半の時期と考えられる。

#### H-11号住居址 (B区 Fig.12 PL.4)

◎位置 X21, Y44~45 ◎面積(2.75m<sup>2</sup>) ◎方位N-84°-E

◎形状 長径(2.80)m 短径(2.35)m 槌丸方形を呈する。掘り込みは27.5cm

◎床面 平坦で部分的に堅緻な面がある。

◎竈 住居址北、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎遺物 繩文片1点、土師器片72点、須恵器片18点、鉄器3点である。

◎備考 10世紀後半の時期と考えられる。

#### H-12号住居址 (B区 Fig.12 PL.4)

◎位置 X22~23, Y45~46 ◎面積(2.53m<sup>2</sup>) ◎方位N-88°-E

◎形状 長径(2.46)m 短径(2.13)m 槌丸方形を呈する。掘り込みは51.5cm

◎床面 平坦で柔らかい床面。

◎竈 住居址北、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎遺物 繩文片5点、土師器片103点、須恵器片43点、灰釉陶器片2点である。

◎備考 10世紀中頃の時期と考えられる。

#### H-13号住居址（B区 Fig.12 PL.4）

◎位置 X22~23, Y47~48 ◎面積 (7.24) m<sup>2</sup> ◎方位 N-79°-W

◎形状 長径3.56m 短径2.92m 殻丸方形を呈する。掘り込みは28cm

◎床面 やや凹凸があり、竈前にを中心に堅緻な面がある。

◎竈 東壁のやや南よりに位置し、焚口部幅50cm、奥行き97cmを測る。

焚口部は広く、煙道部の立ち上がりは急傾斜。袖部を砂岩や土師器片で補強。

◎貯蔵穴 竈の南に1基検出。 P1 長径70cm×短径58cm×深さ25cm

◎遺物 繩文片3点、土師器片212点、須恵器片122点、灰釉陶器3点、鐵器1点、うち、壺3点、甕3点を図示した。

◎備考 10世紀前半の時期と考えられる。

#### H-14号住居址（B区 Fig.12 PL.4）

◎位置 X23~24, Y45~46 ◎面積 (11.64m<sup>2</sup>) ◎方位 N-73°-W

◎形状 長径 4.46m 短径 3.93m 殻丸方形を呈する。掘り込みは52.5cm

◎床面 平坦で竈付近を中心に堅緻な面がある。竈前に所々、焼土が点在する。

◎竈 東壁のやや南よりに位置し、焚口部幅58cm、奥行き124cmを測る。

焚口部は広く、煙道部の立ち上がりは急傾斜。

◎ピット 1基検出。 P1 長径27cm×短径25cm×深さ19cm

◎貯蔵穴 竈の南に1基検出。 P2 長径98cm×短径90cm×深さ46cm

◎遺物 土師器片259点、須恵器片162点、灰釉陶器4点、鐵器1点、うち、壺1点、甕1点を図示した。

◎備考 10世紀前半の時期と考えられる。

## 2 古墳

#### M-1号墳（Fig.13 PL.6）

X46~49, Y40~44グリッドに位置する。後世の耕作による削平を受け、墳頂主体部、周堀のみが確認できた。推定径は11.8mを測り、南北にやや梢円の円墳である。周堀は、E-44°-N-88°-Wの範囲で確認された。地形が南に傾斜しており、周堀も南側は存在せず全周はしていない。幅1.6~1.7m、深さ39~69cmを測る。墳丘部は残存している部分で径5.7~6.4m、高さ20~40cmを測る。墳頂主体部には、石室に使用されていた多くの石が無造作に積まれていた。これらの石の中には天井、奥壁に使われていたと思われる110~130cm四方の石3個が確認できた。石室は幅2m、奥行き3.6mを測り、N-12°-Eに開口する横穴式石室である。東壁に1、西壁に2つの壁石が残存していた。右側には石が置かれていたと思われる痕跡があった。床面の玉石は残存しなかつたが、掘り起こされたと思われる玉石は検出された。古墳に伴う遺物は検出されなかった。

## VI まとめ

今回の調査では限られた範囲でありながら、住居址14軒、古墳1基を検出することができた。当地域は今までに発掘調査を行う機会が少なく、資料も少ない現状である。そのような中で今回の田口八幡I遺跡の発掘調査は当地域を研究する上で、貴重な資料を得ることができた。以下、今回の発掘調査の成果を遺跡の立地上、田口八幡II遺跡を含めてまとめてみたい。

### 1. 住居址について

今回、検出できた住居址14軒は9世紀前半から11世紀初めにかけての平安時代が中心である。遺構面、住居址覆土から繩文土器片も少量出土していることから繩文時代の住居址も存在していたと思われるが、今回の調査での検出はなかった。したがって、検出できた住居址について、まとめてみたい。

出土遺物が少ないため、時期を判断しかねる住居址もあったが、竪の位置や主軸の方向などから推定時期とした。その中で注目すべき点は、B区中央部から東にかけてのFP混の黒色土を掘り込んでいる住居址である。このFP混黒色土はB区中央の標高154mを境に東に堆積している。この範囲は、隣接する田口八幡II遺跡のA、B区においても同様で標高154mが堆積の境となっており、この標高が堆積の上限であると考えられる。このFP混黒色土を掘り込んでいる住居址は田口八幡I遺跡で6軒、田口八幡II遺跡で5軒の計11軒である。これらの住居址の時期をみてみると、ほとんどの住居址が9世紀前半から10世紀前半の範囲におさまる。そして、この時期以降の10世紀中頃からの住居址は本調査区A区および田口八幡II遺跡調査区のB、C区に集まっている。10世紀中頃以降の住居址が検出された標高を見ると、いずれの調査区でも156m以上からという傾向が見られた。

以上のことから考察すると、本遺跡内における集落はこのFP混の黒色土堆積地点から標高の高い方へ移動したと考えられる。この地点は地形的に東に流れる法華沢川に向かって谷地状になっていることから、地形が不安定で自然災害等で住居が流失され、標高の高いところへ移動したと考えられる。

### 2. 古墳について

今回の調査で検出された古墳は残存状況が非常に悪く詳細については不明であるが、得られた情報についてまとめてみたい。

台地縁の南東に傾斜している地形に位置し、周堀は墳丘を巡って山側である北に馬蹄形状に掘削されており、山寄せ式の古墳と考えられる。このような斜面上の山寄せ式の古墳は隣接する富士見村においても見られる。堀の幅、深さは一定ではなく、周堀の内径は推定11mを測る。墳丘部は擾乱を受け残存状況はきわめて悪く、特に傾斜している南面は削平を受けていたが、東西5.7m、南北6.4mを測る。平面形状は南がやや広がる卵形に近い円墳である。前部は削平のため不明である。

石室部もひどく擾乱を受けており、ほとんどの石が取り除かれた状態であった。これらの石は石材や加工されていることから石室に使用されていたと考えられる。これらの石の中には110~130cm方形の石が3個あり、天井石あるいは奥壁に使用されていたと考えられる。現存していた石は東壁に1個、西壁に2個の計3個であ

る。ほかに東壁には3つ、西壁に1つの掘り方を検出した。東壁の石の1個の長さは現存する石、掘り方部分からの想定から40~50cmであるが、西側は現存する2個は70cm、掘り方部分も70cmと考えられる。高さはいずれも60cm前後であることから、2段積みが考えられる。この考え方からすると、石室内の高さは120~130cm前後が想定され、前述した方形の石が奥壁として一致する大きさである。また、これら壁石の裏側は鶏卵大の川原石を厚さ約1.2mの幅で詰めていた。石室開口方向はS-12°-Wで、石室前部が擾乱を受けているため全長は推定だが3.5m前後と考えられる。幅は奥壁部で70cm、東西壁石掘り方確認部で1.4mである。床面もほとんど擾乱を受けており掘り方のみが確認されたが、擾乱に多数の鶏卵大の川原石が混ざっていたことから、これらの石が敷き詰められていたと考えられる。出土遺物については古墳に結びつく遺物はなかったが、2次の堆積で石器等が出土した。

次に周辺地域における古墳の様子を見てみたい。「上毛古墳総覧」によると、旧南橋村では45基、隣接する富士見村では29基(「富士見村誌」によると、90基)が確認されており、旧利根川左岸段丘上に一連の古墳群が形成されている。うち、11基の古墳が調査確認されている。そのほとんどが古墳時代終末期の円墳であり、本遺跡の古墳もこの時期に該当する。これらの古墳の中では富士見村陣場・上庄司原古墳群内の古墳が規模、構築技術等からこの地域の支配者階層のものと想定され、その周辺に小円墳が散在する形をとったものとみられる。前橋市側の本遺跡周辺では西に塩原塚古墳を中心とする古墳群が「上毛古墳総覧」で確認されているが、塩原塚古墳以外の古墳はいずれも小型の円墳が分散しており、富士見村の例と同様である。また、本遺跡の場合、細部の状況で見ると、南の八幡山で径15mほどの円墳が確認されており、立地条件や規模から考えると、内容の相違がうかがえる。今回の発掘調査では古墳時代の集落は検出されなかったが、これらの古墳を支えた集落は本遺跡の一段低い部分に営まれたものと考えられ、地域的には縄文~平安時代まで当地の集落は継続していたことが考えられる。

#### 参考文献

- 「小原目遺跡」 富士見村教育委員会 1998
- 「前橋市史」 第1巻
- 「上毛古墳総覧」
- 「富士見村誌」 1954
- 「愛宕山遺跡 初室古墳 愛宕遺跡 日向遺跡」 富士見村教育委員会 1994
- 「白川遺跡 由森遺跡 久保田遺跡」 富士見村教育委員会 1989

Tab.1 土器観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ	成・焼形方法				備 考	Fig	
				①粘土	②機成	③色調	④残存			
1	H-2	灰陶高台碗	16.4	4.9	細粒	良好	灰白	2/3 外輪、細縫。 凹輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け 輪底刷毛焼き。	14
2	H-2	灰陶盤环	(13.2)	(4.7)	細粒	良好	灰白	1/5 外輪、細縫。 凹輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。	14
3	H-3	灰陶深腹圓筒形	(14.4)	5.9	細粒	良好	にいき種	1/3 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	14
4	H-5	灯明皿	9.0	1.8	中粒	良好	にいき種	2/3 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。	14
5	H-5	高脚打明皿	(9.4)	4.2	細粒	良好	にいき種	1/2 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	14
7	H-9	灰陶高台皿	15.0	5.1	細粒	良好	明オリーブ灰	2/3 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	14
6	H-9	灰陶高台皿	(14.0)	3.4	細粒	良好	灰白	1/2 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	14
8	H-9	灰陶高台皿	(15.2)	3.2	細粒	良好	灰白	1/3 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	14
9	H-9	甕	(21.0)	(8.9)	粗粒	良好	椎	1/5 外輪、粗縫。 底輪、粗縫。	輪底刷毛焼き。	14
10	H-10	土師點环	13.0	2.9	細粒	良好	にいき赤褐	4/5 底轮、模様。	輪底刷毛焼き。	14
11	H-10	土師點环	12.4	3.9	中粒	良好	灰白	完形 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。	14
12	H-10	灰陶盤环	10.2	3.3	細粒	良好	にいき青灰	完形 外輪、細縫。 凹輪糸切り拂で調整。	輪底周辺部調整窓	14
13	H-10	土師深腹鉢	21.0	14.2	細粒	良好	にいき種	2/3 外輪、模様。	輪底刷毛焼き。	14
14	H-10	土師壺	(21.6)	26.7	細粒	良好	椎	1/3 外輪、粗縫。 底輪、粗縫。	輪底刷毛焼き。	14
15	H-10	灰陶高台碗	14.5	8.0	細粒	良好	灰	4/5 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	15
16	H-12	灰陶深腹圓筒形	15.0	5.5	細粒	良好	灰黄褐色	1/2 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。	15
17	H-12	灰陶高台碗	14.0	5.0	細粒	良好	にいき種	2/3 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け 輪底から周縁部にスス付着。	15
18	H-13	灰陶深腹圓筒形	(14.2)	5.4	細粒	良好	にいき種	1/2 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	15
19	H-13	土師器	19.0	26.7	細粒	良好	にいき赤褐	1/2 外輪、横縫。	輪底刷毛焼き。	15
20	H-13	土師器	19.0	(22.0)	細粒	良好	椎	1/2 外輪、横縫。	輪底刷毛焼き。	15
21	H-13	土師器	20.0	(21.0)	細粒	良好	明赤褐	1/2 外輪、横縫。	輪底刷毛焼き。	15
22	H-14	灰陶盤环	12.6	4.2	細粒	良好	にいき赤褐	2/3 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。	15
23	H-14	灰陶高台碗	(14.0)	5.7	細粒	良好	浅黄	1/2 外輪、細縫。	凹輪糸切り拂で調整。高台後付け	15

注) 表の記載は以下の下基準で行った。

①粘土は、細粒 (0.9mm以下)、中粒 (1.0~1.9mm)、粗粒 (2.0mm以上)とした。

②焼成は、極良、良好、不良の三段階。

③色調は土器表面で観察し、色名は新標準土色貼 (小山・竹原1976) によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を [ ]、復元値を ( ) で示した。

Tab.2 特殊遺物・石器観察表

番号	出土位置	器 形	長さ	幅	厚	重さ	石 材	備 考	Fig
1	H-8覆土	土鍬	4.3	1.9	1.8	13.2	—	ほぼ完形。中央部に膨らみを持つ。	16
2	B区覆土	土鍬	4.6	1.6	1.6	11.2	—	ほぼ完形。太さはほぼ均等。	16
3	B区覆土	土鍬	4.0	1.6	1.6	9.5	—	ほぼ完形。下部に膨らみを持つ。	16
4	B区覆土	土鍬	(3.8)	1.7	1.6	9.1	—	一部欠損。下部か中央部に膨らみを持つ。	16
5	B区覆土	土鍬	4.7	1.2	1.1	5.7	—	ほぼ完形。やや紐身で太さは均等。	16
6	B区覆土	土鍬	3.7	1.0	1	3.7	—	ほぼ完形。他のものと比べるとやや小振り。	16
7	H-10	劔鍬車	4.5	4.5	1.6	50.5	滑石	裏面円孔周囲に擦り痕あり。	16
8	M-1覆土	打製石斧	9.2	4.1	1.2	50.0	頁岩	表面に自然面を残す。	16
9	M-1覆土	打製石斧	(8.1)	5.1	1.2	82.5	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。刃部一部欠損。	16
10	M-1覆土	打製石斧	(7.3)	3.7	1.4	53.0	頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。	16
11	M-1覆土	打製石斧	13.4	5.4	2.3	220	頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。	16
12	M-1覆土	打製石斧	10.2	4.0	1.5	84.5	黒色頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。	16
13	M-1覆土	磨製石斧	(11.4)	4.5	2.6	180	緑色変岩	—	16
14	H-13	砥石	13.4	4.4	2.5	280	砾沢石	表面、裏面に使用痕がある。	16

注) 表の記載で、大きさの単位はcm、重さの単位はgであり、現存値は( )で示した。

Tab.3 鉄器観察表

番号	出土位置	器 形	長さ	幅	厚	残存	備 考	Fig
1	H-11	鐵	(9.0)	0.8	0.4	1/2		16
2	H-14	劔鍬車	(6.7)	0.4	0.4	1/4		16
3	H-14	留金具	(19.4)	0.5	0.5	3/4	先端部が曲がっている。	16

注) 表の記載で、大きさの単位はcm、重さの単位はgであり、現存値は( )で示した。

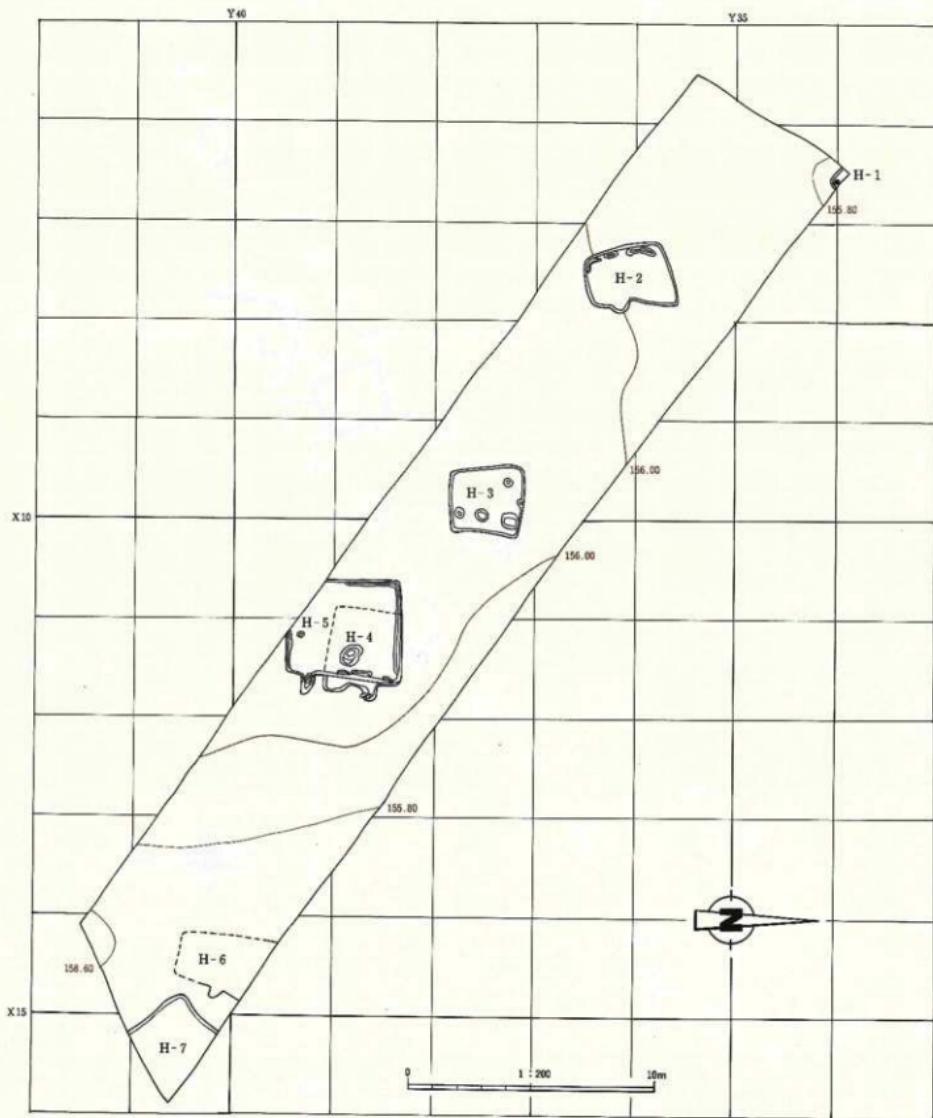


Fig 7 A区全体図

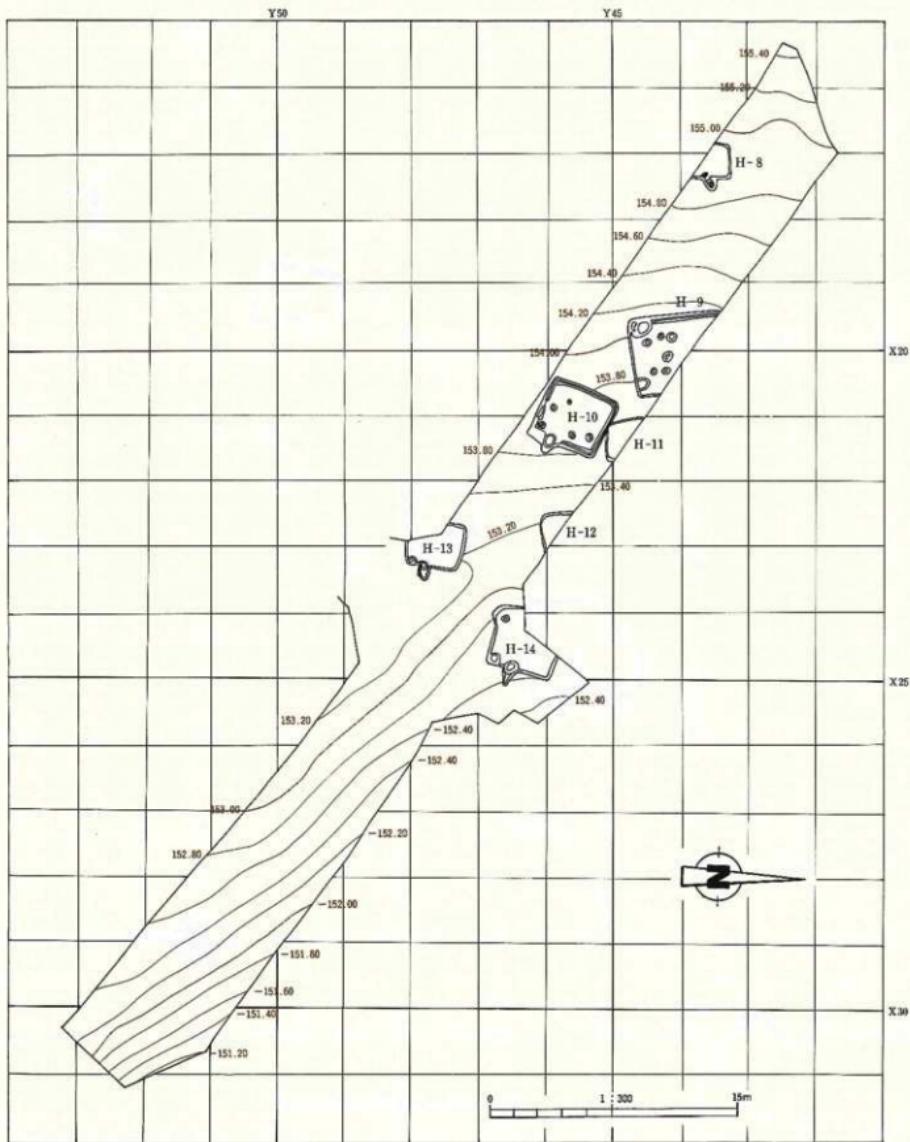


Fig 8 B+C区全体図

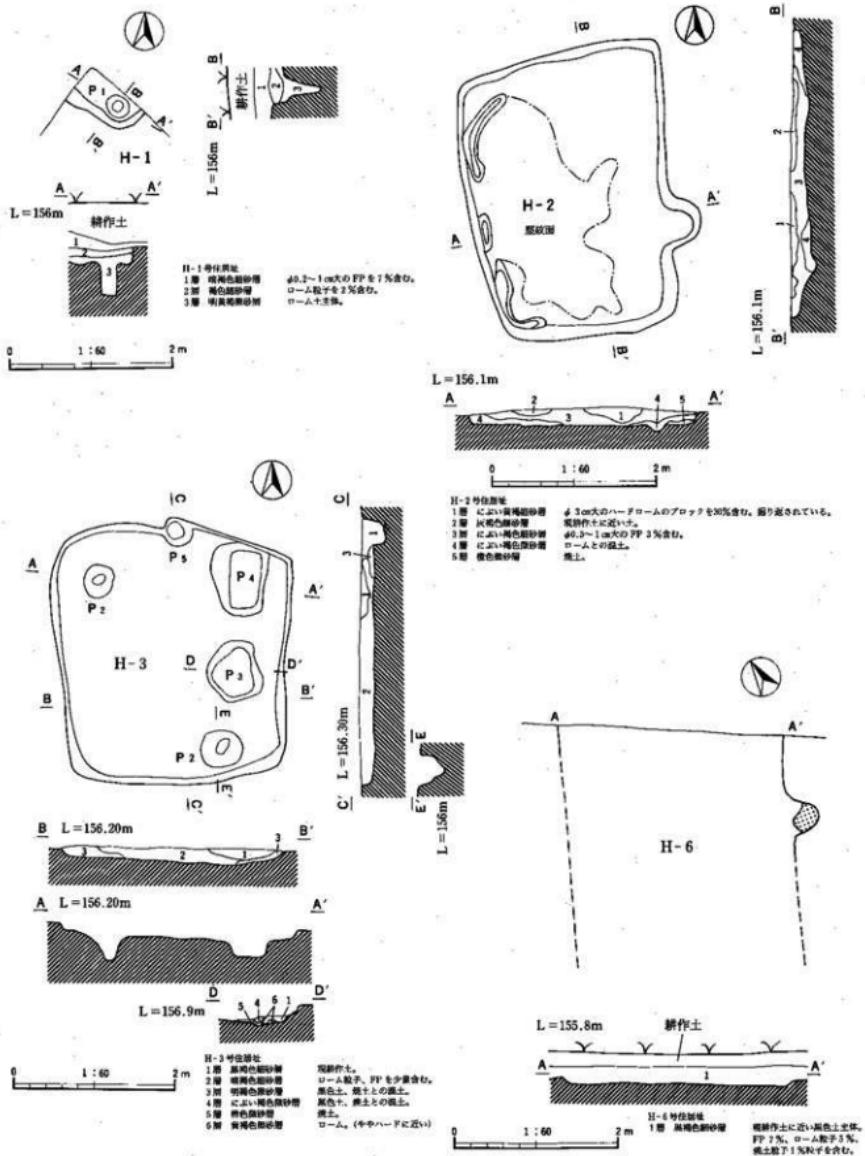
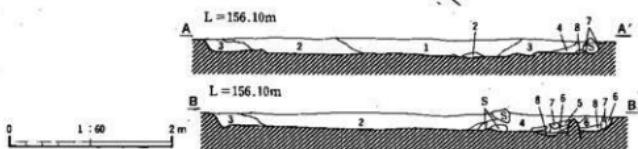
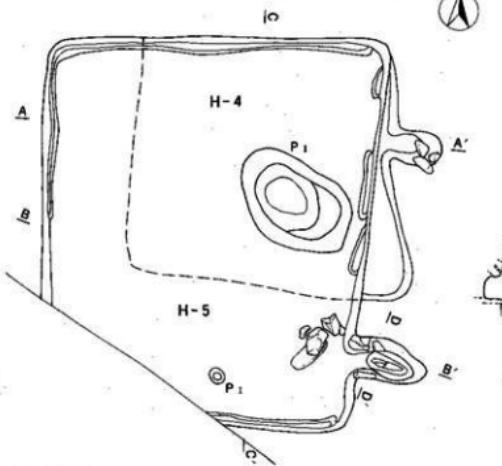


Fig 9 H-1、2、3、6号住居址

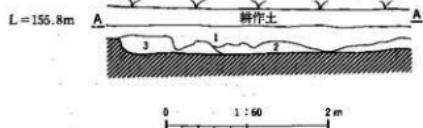
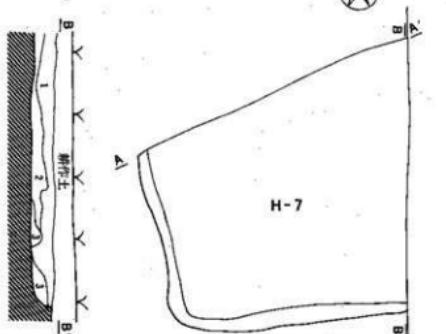
H-4、5号住居址  
 1層 沼沢地帯砂層  
 2層 にじいろ色細砂層  
 3層 黒褐色細砂層  
 4層 灰褐色細砂層  
 5層 明黄色細砂層  
 6層 にじいろ色細砂層  
 7層 黑褐色細砂層  
 8層 にじいろ色細砂層

H-4、5号住居址  
 1層 沼沢地帯砂層  
 2層 にじいろ色細砂層  
 3層 黒褐色細砂層  
 4層 灰褐色細砂層  
 5層 明黄色細砂層  
 6層 にじいろ色細砂層  
 7層 黑褐色細砂層  
 8層 にじいろ色細砂層

H-4、5号住居址  
 1層 沼沢地帯砂層  
 2層 にじいろ色細砂層  
 3層 黒褐色細砂層  
 4層 灰褐色細砂層  
 5層 明黄色細砂層  
 6層 にじいろ色細砂層  
 7層 黑褐色細砂層  
 8層 にじいろ色細砂層



L = 155.8m

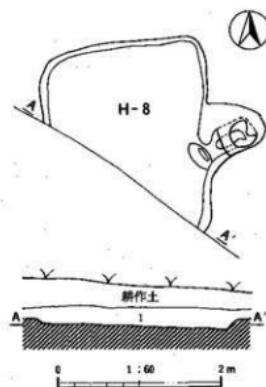


H-7号住居址  
 1層 黒褐色細砂層  
 2層 黑褐色細砂層  
 3層 にじいろ色細砂層

FP 1～3cm大のFP5%含む。  
 FP 3%含む。

H-8号住居址  
 1 層 黑褐色細砂層

FP 5%含む(耕作土に近い黒色土)。



H-8号住居址  
 1層 黒褐色細砂層  
 2層 黑褐色細砂層  
 3層 にじいろ色細砂層

FP 1～3cm大のFP5%含む。

FP 3%含む。

ロームと黒色土の混土。

Fig10 H-4、5、7、8号住居址

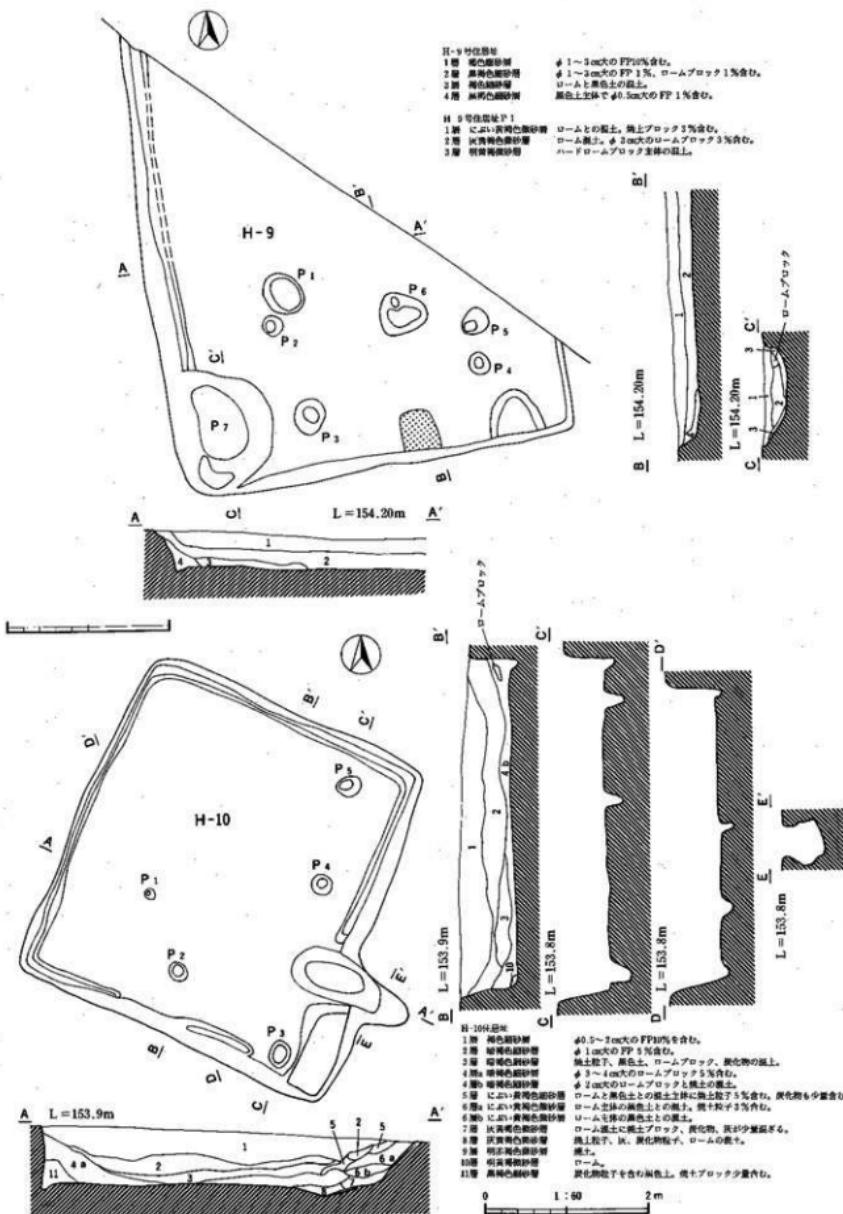


Fig11 H-9、10号住居

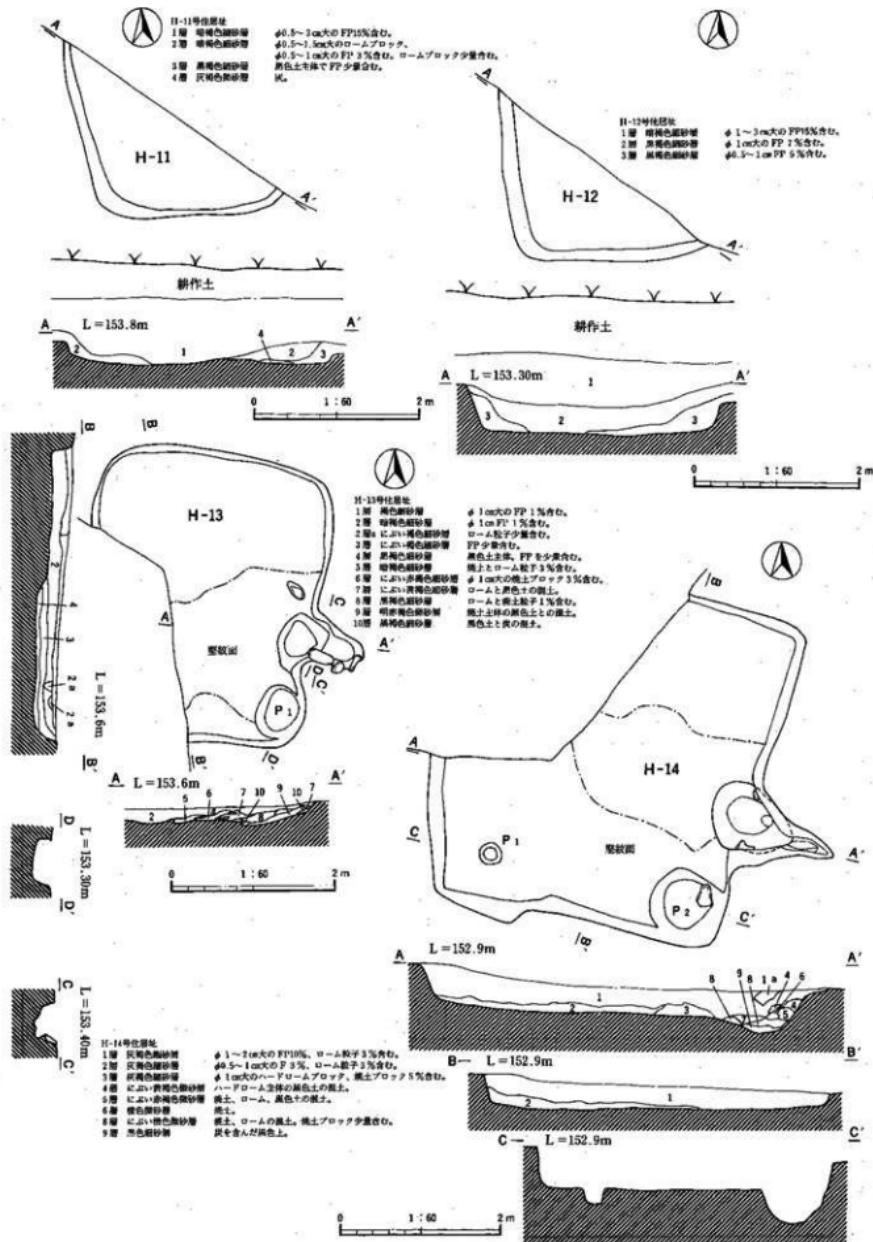


Fig12 H-11、12、13、14号住居址

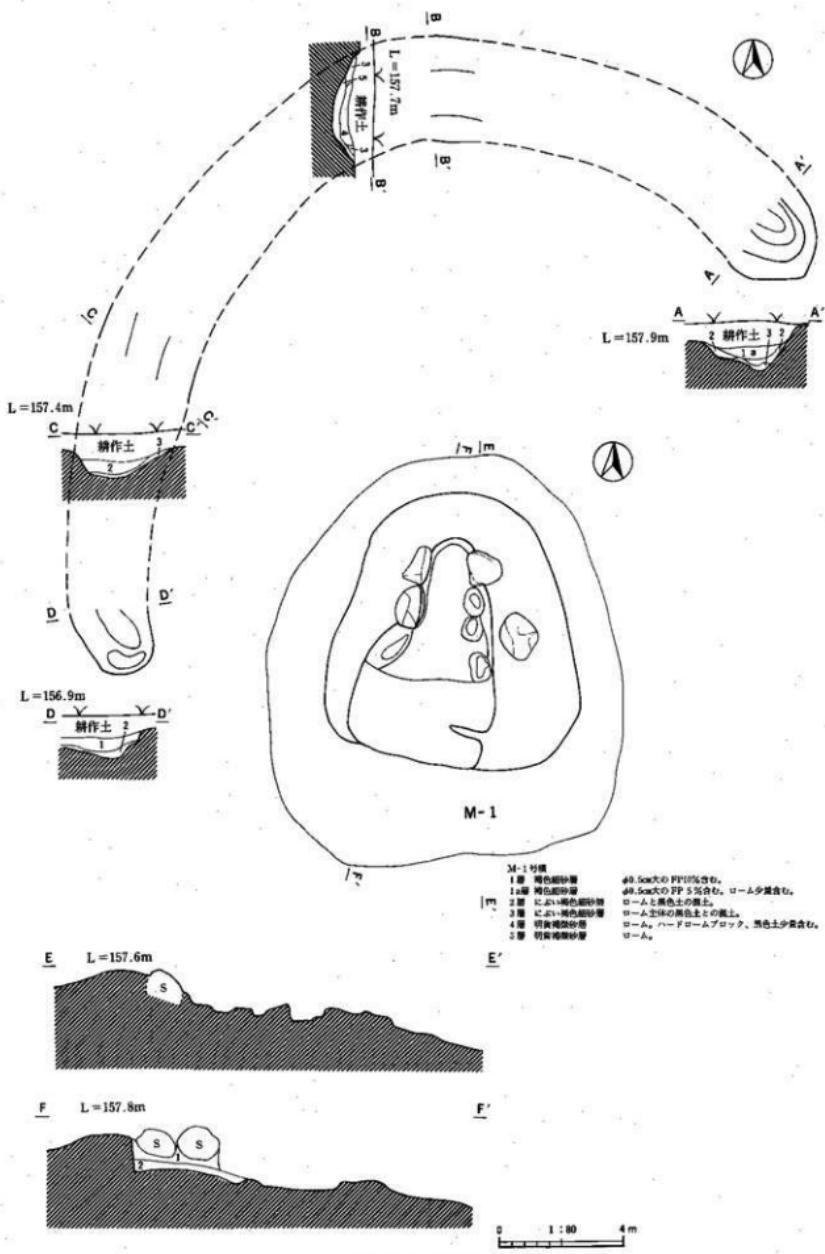


Fig13 M-1号墳

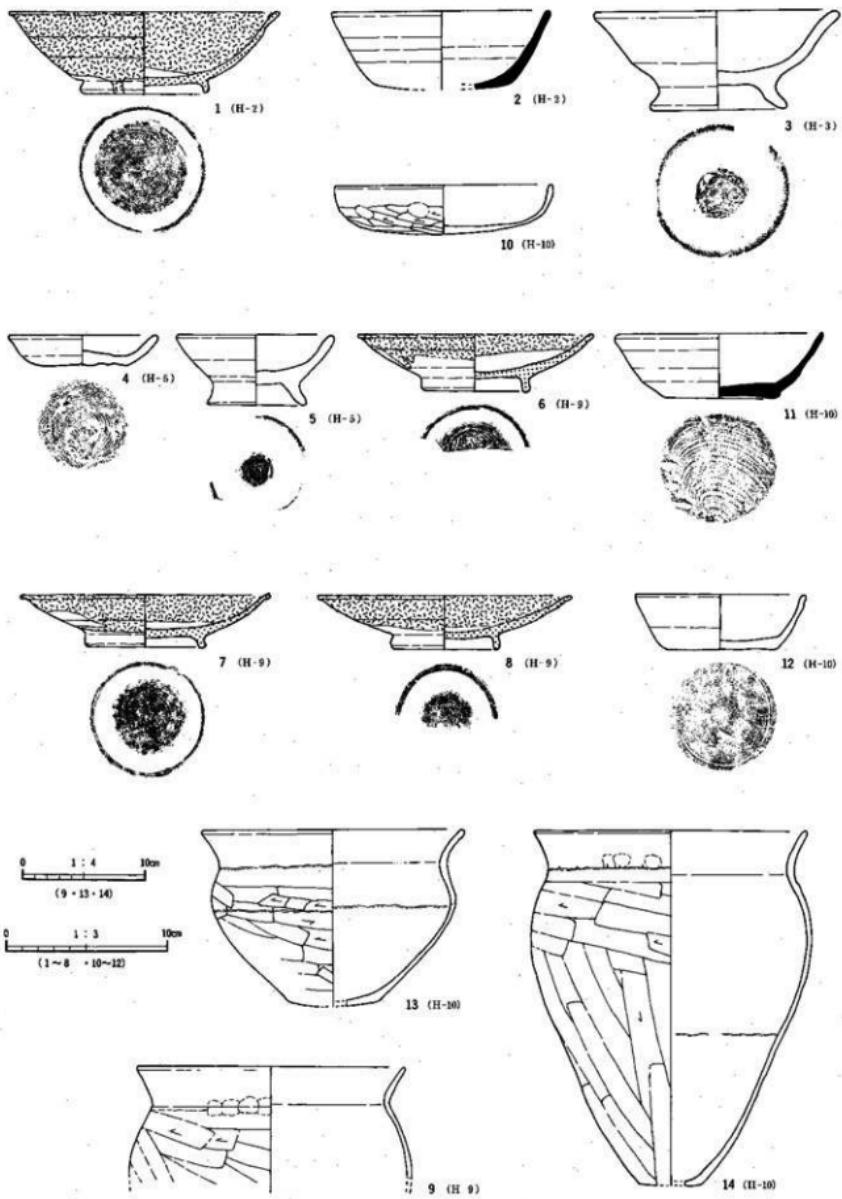


Fig14 H-2、3、5、9、10号住居址出土の土器

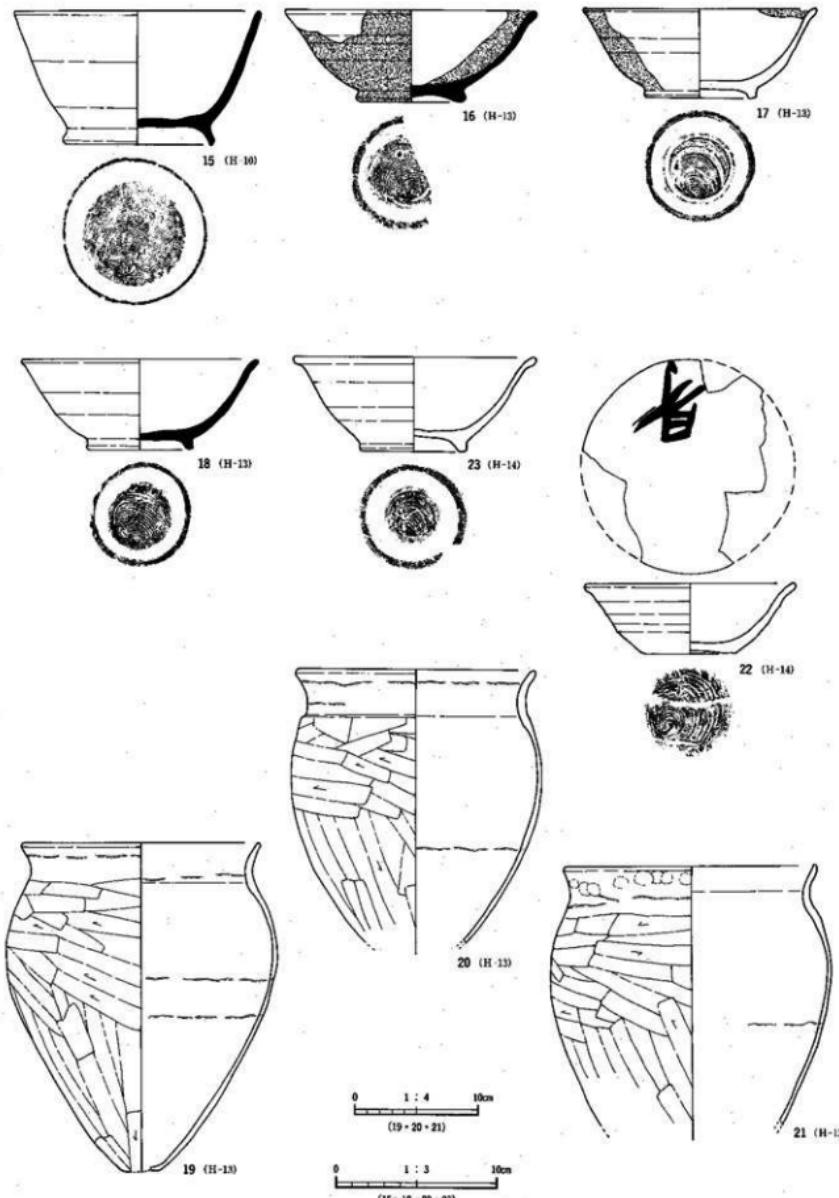


Fig15 H-10、13、14号住居址出土の土器

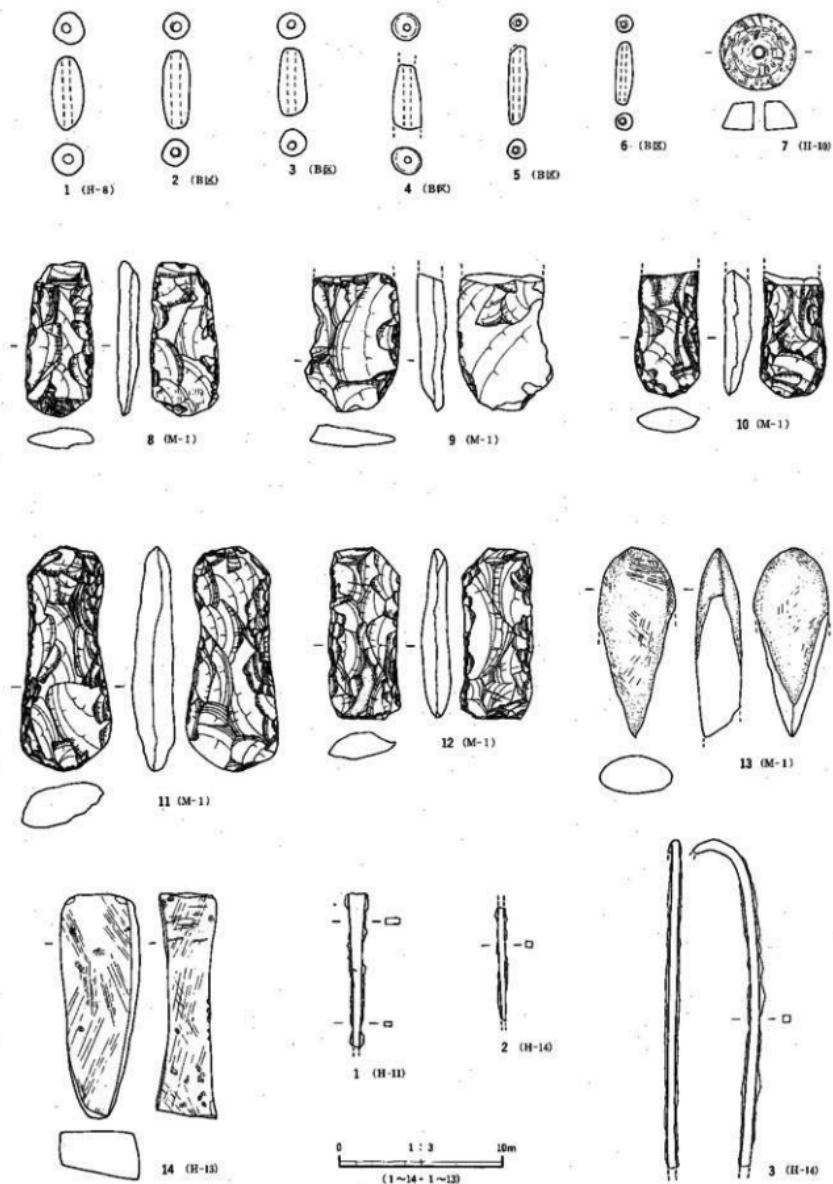


Fig16 特殊遺物・石器・鐵器



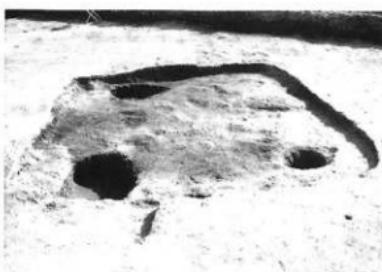
A, B, C区全景 (南)



H-1号 住居跡全景セクション (南東)



H-2号 住居跡全景 (南)



H-3号 住居跡全景 (北)



H-4号 住居跡カマド (西)



A区 H-4・5号全景(南西)



H-5号 住居跡カマド石(南)



H-5号 住居跡カマド全景(西)



H-6号 住居跡全景(南西)



H-7号 住居跡全景(南)



H-8号 住居跡全景（南西）



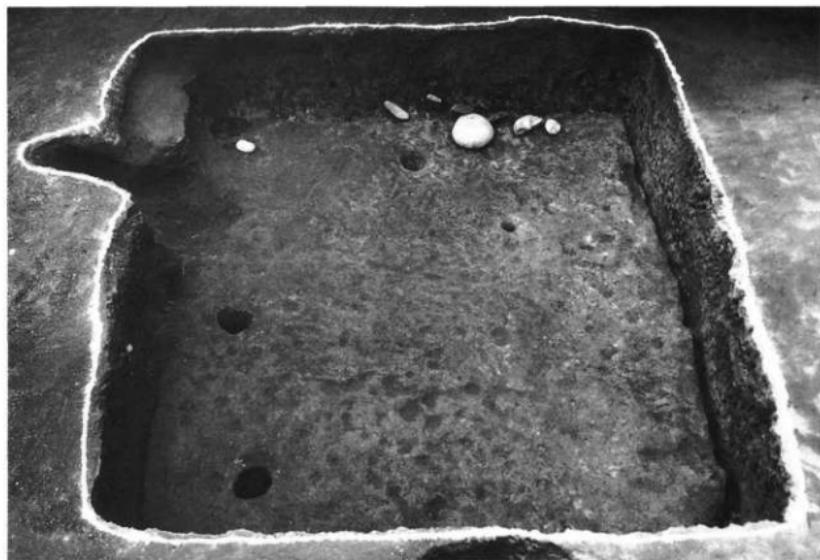
H-8号 住居跡カマド（南西）



H-9号 住居跡全景（南）



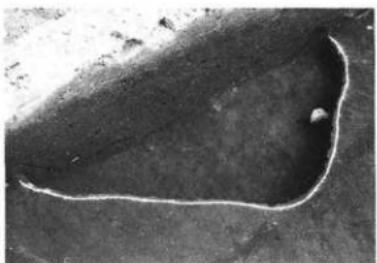
H-10号 住居跡カマド全景（西）



H-10号 住居跡全景（北）



H-10号 住居跡遺物出土状態（東）



H-11号 住居跡全景（南西）



H-12号 住居跡全景（南西）



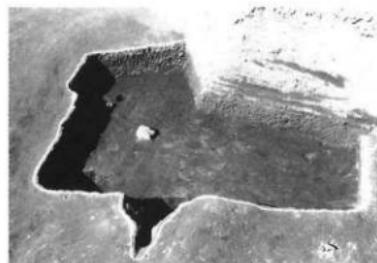
H-13号 住居跡全景（東）



H-13号 住居跡カマド全景（西）



H-13号 住居跡遺物出土状態（南）



H-14号 住居跡全景（東）



H-14号 住居跡カマド全景（西）



A区全景(西)



B·C区全景(西)



B·C区全景(东)



D区全景(北)



B区全景(北)



古墳全景（逆曲）



M-1 石室正面（南）



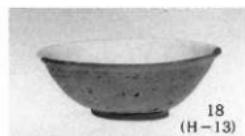
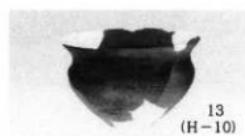
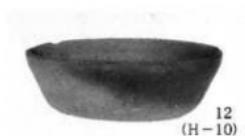
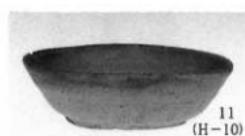
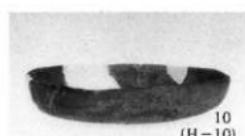
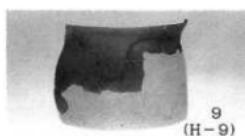
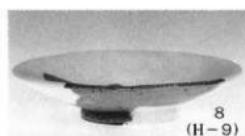
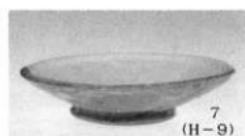
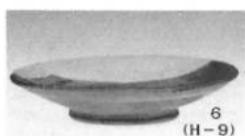
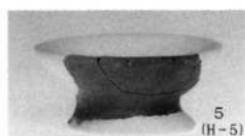
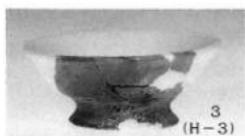
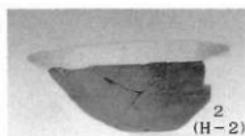
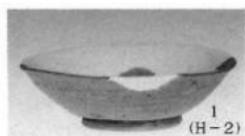
M-1 石室奥裏込石（南）

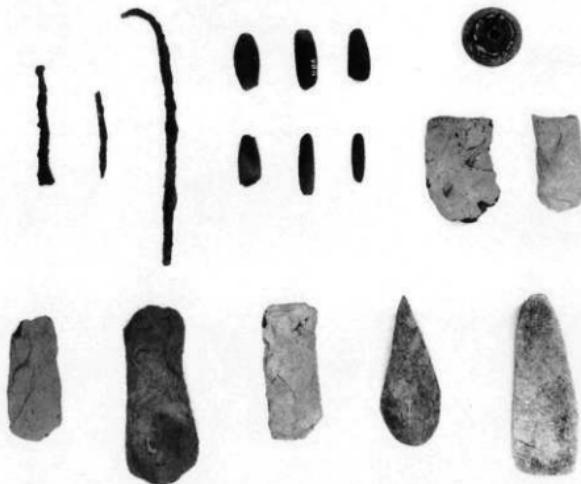
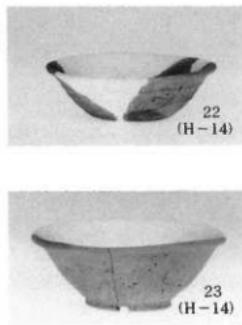


M-1 石室西側壁（南東）



M-1 周堀トレンチ③（西）





鉄器・特殊遺物・石器

## 抄 錄

フリガナ	タグチハチマンイチセキ
書名	田口八幡I遺跡
副書名	田口町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐藤則和 平石和明
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦2000年3月28日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
田口八幡I遺跡	前橋市田口町	10201	11B6	36°26'32"	139°03'21"	19990916 19991203	約1,100m <sup>2</sup>	土地改良事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
田口八幡I遺跡	集落跡 古墳	奈良時代～平安	堅穴住居14軒 古墳1基	縄文土器、土師器、須恵器、鉄器、石器、 石製品、特殊遺物
特記事項				

### 田口八幡I遺跡遺跡

2000年 3月20日 印刷

2000年 3月24日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前橋市上泉町664番地の4

印刷 朝日印刷工業株式会社  
前橋市元總社町67番地











